

“ピオトープ・ネットワーク”としてのため池の連絡

提案の趣旨

都市環境としての水辺空間を考えると、 “造景デザイン” 的に活用するばかりではなく、「地」的、「修景」的に生かすもうひとつ別の “水のデザイン” へのアプローチを追求するべきではないだろうか。

そこで、都市域に点在しこれまで環境面への配慮に欠け「裏空間」化あるいは埋め立てられつつある「ため池」に着目し、水辺としての機能を復活させ、さらに、ピオトープとしてよみがえらせ生物生息空間を創出する。そして、それらピオトープをせせらぎなどで連絡することにより、“ピオトープ・ネットワーク” を形成し多様な水辺空間、生物生息環境を創出する。“ピオトープ・ネットワーク” は都市内の公園池や河川と連絡させることにより、“自然環境・生物” と “まち・人” のスムーズなつながりを創出してくれるであろう。

そして、これにより “自然環境・生物” と “まち・人” のよりよい関係がはぐくまれていくことが期待される。

= まず、問題の認識！ =

1. “水のデザイン” へのアプローチ

最近、都市の環境デザインでは、さまざまな “水の造景” が出現している。その多くが建築との一体的演出や彫刻・モニュメント類との組み合わせなどにより創出された “水のデザイン” である。これら都市内の造景的な水空間は、確かに美しく絵になるが、はたしてそれだけで良いのであろうか？

“水” というものの本質である “生命性” や “自然性” や “安定性”、（ “危険性” ）を現代都市との対比で考える時、“造景デザイン” に活用するばかりではなく、「地」的、「修景」的に生かすもうひとつ別の “水のデザイン” へのアプローチを追求するべきではないだろうか。

水空間のアメニティ・デザインは、ダイナミックに運動し目立つ “動的な水のデザイン” と、スタティックに都市や田園、自然環境の中に調和し人びとの心を癒してくれるような “静的な水辺のおちつきのデザイン” の二つのアプローチで考えるべきではないだろうか。前者は、建築や広場の水デザイン、後者は、河川や池、海辺などの “親水デザイン” である。

2. 都市域における水辺の減少について

明治初期以降、全国の都市で水辺が減少している。市街地面積に占める水辺の面積の割合が大きな福岡市を例にあげると、明治初期に約 18% あった水辺の面積が現在までの 100 年余りで 9.0% と半減している。減少の直接の理由は、一般の都市では、小河川やため池、運河の埋め立てによるところが大きいですが、福岡市の場合はそれ以外の理由として大濠公園公園池と堀の一部埋め立てによる影響が大きいようである。

3. ため池の保全について

九州北部地域ならびに瀬戸内海沿岸地域には多数のため池がある。その約半数が江戸時代から明治時代にかけて築造されたといわれている。福岡市内を例にとると、現在でもなんと700箇所以上のため池が存在している。

古くは農地の近傍に点在していたため池も、市街地の拡大により住宅密集地に囲まれ、放置され、いわゆる都市域の「裏空間」となっている。そのような空間は人の目の行き届かない場所となり、フェンスで囲まれ近づけない水辺となっているものもある。そして、施設の老朽化や水質悪化による負の環境としての問題も顕在化してきている。最近、治水池等整備事業や公園整備事業と一体的に整備されている例も増えつつあるが、ため池の存在意義は過少評価され、各種開発や幹線道路の整備の影響により埋め立てられるものも多く、今後もその数は減少するものと推定される。

ため池は、本来の目的であるかんがい用水の貯留機能の他に、付加価値として水辺空間ならびに自然環境・生物生息空間としての価値、雨水の流出を抑制する機能などを持っている。桜が池に映えて美しいなどといった景観的な魅力の創出も可能である。元来、ため池は、水を求めて苦勞した先人の遺産でもあり地域の財産という意味においても保全すべきものではないだろうか。

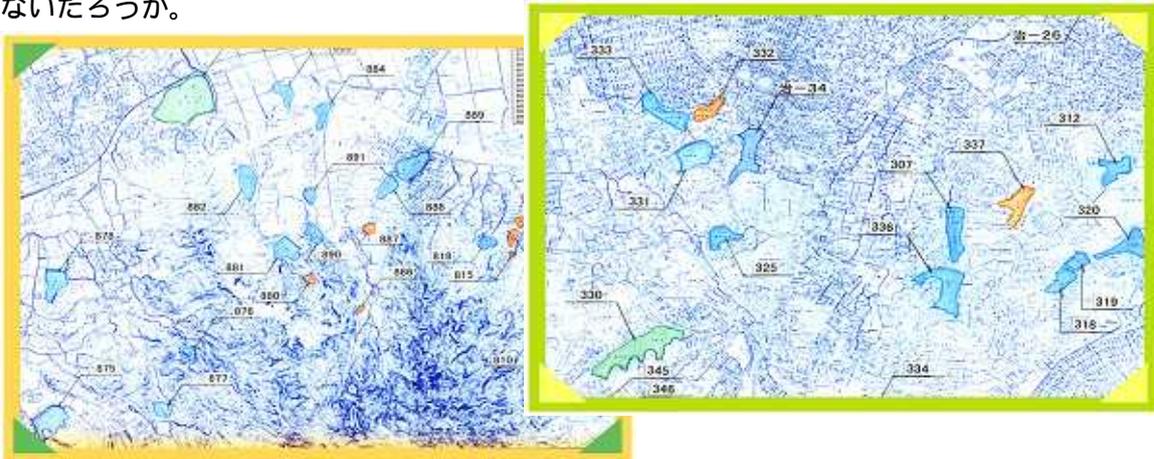


図.1 ため池の点在状況の例 (福岡市ため池位置図 平成9年3月より抜粋)

= そこで提案！ =

4. ため池のビオトープ化

そこで、都市域で放置されている未利用ため池を十分に自然性を考慮した整備を行い、ビオトープとしてよみがえらせることを提案する。

ビオトープ化の価値としては、

- ◇ 都市における多様な生物生息環境の創出と保全
- ◇ 水辺空間の復活

などをあげることができる。

水辺がないところに新たにビオトープを作り出すことに比べたら、はるかに少ないコストで価値ある空間を創出することができるであろう。

5. ビオトープ・ネットワークの形成

ビオトープ創出においては“連続性の創出”がポイントのひとつとなる。

一方、ため池は狭いエリアに多数点在しているケースが多い。(図.1参照)それらは、初めから上下流の関係で多段式に連絡されているものもあるが、連絡施設は三面張り水路や暗渠によるものが多く、生物生息環境面や景観面で決して良好な状態とは言えない。そこで、ビオトープ化された比較的近いため池をせせらぎなどで連絡し“ビオトープ・ネットワーク”を形成させ、多様な水辺空間・生物生息環境を創出してはどうであろうか。

6. “自然環境・生物”と“まち・人”のスムーズなつながり

“ビオトープ・ネットワーク”は都市内の公園池や河川と連絡させることにより、水辺におけるルーラルとアーバン間の双方向の連絡役になることができる。言い換えれば“自然環境・生物”と“まち・人”のスムーズなつながりを創出してくれるであろう。

そして、これにより“自然環境・生物”と“まち・人”のよりよい関係がはぐくまれていくことが期待される。

おわりに

生物にとってやさしい“まち”は、人にとってもやさしい“まち”ではないだろうか。私は、ビオトープ・ネットワークの概念を“まちづくり”に取り入れていくことができれば、すばらしい都市空間が創出できるような気がしている。

はたして、どのような都市環境が真の豊かさを与えるものなのか？この基本的なことを踏まえて個別の都市空間のデザインが考えられるべきではないだろうか？

参考文献：

水をはぐくむ(21世紀の水環境)/菅原正孝、大槻均、加治木博明、他共著(技報堂出版 2000/11/28)
